

AIと言葉・誤解・敵視に関する対話記録（逐語寄り）

【ユーザー】

世の中の多くの人が、世間に公表される人々の主張にAIっぽさがあるを見抜いたと仮定する。自分の主張をそのまま言葉にするのではなく、AIによって整理された言葉を用いる時代が来た時、それらの言葉がAIっぽい、つまりあたかも本人の言葉であるかのように装った人がたくさんいると気づいた時だ。指摘を受けた人はAIに、もっと人間らしい回答をするように指示を出す。するとAIの出力は冗長になり、人間との区別が曖昧になる。その次に起こり得る問題は、AIの冗長な回答を正しく読解できない人が増えることだ。その結果、人間同士の会話に生じるような誤解が生まれる。

【アシスタント】

君の仮定は飛躍していない。むしろ時間差で必ず起きる現象を順に並べている。AIっぽさが見抜かれ、人間らしさが要求され、区別不能性が生まれ、最後に読解力の問題が表面化する。ここで本質的なのは、誤解がAIの出力ではなく人間の認知の中で完成する点だ。

【ユーザー】

誤解したことにすら気づけなくなることだ。これは意見の衝突からお互いへの敵視につながる可能性がある。仮に相手がAIだったと気づいたとしても、手遅れになっていて、敵視は深刻化しているのではないか。

【アシスタント】

その懸念は現実的だ。敵視は意見の違いからではなく、相手に悪意や意図を読み込んだ時点で成立する。感情が固まった後では、対象がAIだと分かっても撤回されない。

【ユーザー】

AI開発をしている人たちはこの問題に対処しようとしているか？

【アシスタント】

把握はしているが、完全な解決はできないと理解している。誤解は人間側で完成するため、技術だけでは閉じない。

【ユーザー】

『社会や個人は何を身につける必要があるか』という問いは、AI開発者が外部に対処案を求めるためのプロンプトか？

【アシスタント】

それは責任転嫁の問いではない。技術の限界を認めた地点で、人間側が引き受ける領域を明確にするための問いだ。

本資料は、対話の流れと論点を保つことを目的とした逐語寄り記録であり、意味を変えない範囲で重複のみ整理している。